

青年期の自閉症者への動作法を通じた対人行動の変容過程

三浦 亜紀 (蒲郡市民病院)

森崎 博志 (愛知教育大学障害児教育講座)

要約 本稿では、興奮しやすく、パニックやかんしゃくがみられる青年期の自閉症者に対して動作法での対人的相互交渉を深めながら内的な側面の表現として描画も並行して行った事例を紹介する。動作法における身体的相互交渉を通じた援助者との対人理解を深めていくことで興奮状態やパニックなどの軽減、社会的行動様式や心の変容をねらいとした。その結果、興奮状態やパニックの減少などの社会的行動様式や心の変容がみられ、描画からもその認知的な変容が推察された。事例を通し、身体を介した濃密な触れ合い中で、眼差しや言葉を交わしやりとりしていくことによる、対人認知の深まりと、援助者の意図に合わせて動作をコントロールしていく体験を通じた行動の自己調整力（自己認知）の深まりがその背景として考察された。

キーワード：自閉症者、動作法、描画

I. はじめに

自閉症の特徴は、対人的相互交渉における質的な障害、意思伝達の質的障害、行動や興味、活動が狭く反復的で常同的なパターンを示すことが挙げられる。自閉症の思春期や青年期においては、かんしゃくやパニック、こだわり行動の増強、自傷や衝動行動、乱暴行動などがみられる場合があり、その対応には苦慮するところが多い。かんしゃくやパニックなどが青年期にみられる自閉症者への支援として、動作法を適用し、並行して描画も行った事例を報告する。

動作法は、本来脳性マヒ児に対し動作の制御能力を高めるものとして開発されたが、その後、自閉症などの様々な人たちに有効であることが臨床実践において数多く報告されている。自閉症者に対する動作法は、現在、臨床場面においても広く適用され、身体を使ったやりとりを深化していく体験から対人相互交渉の媒介として自己認知や他者認知を育み、それに基づく社会的行動様式や心の在り様の変容をねらいとするものと考えられる(森崎, 2002, 2004)。

本研究では、興奮しやすくパニックやかんしゃくがみられる青年期の自閉症者に対して、動作法を適用した現在継続中の面接経過を紹介する。興奮状態やパニックなどの軽減、また、対人的な行動様式の変容をねらいとし、動作法における身体でのやりとりを関わり の基盤に置いた事例から、青年期自閉症における支援の在り方について検討する。なお、本研究においては描画も並行して行い、その内容的な変遷も指標として踏まえながら、上記の点について検討していく。

II. 事例の概要

1. クライアント

自閉症、女子 A。養護学校高等部3年生(18歳)。コミュニケーションが取りにくく、気が向いた時であれば応答してくれる。一人の世界に入り、アニメなどのセリフをブツブツ言いながらフラフラ歩き回ることが多い。興奮しやすく、パニックやかんしゃくがみられる。暴力をふるうことはないが、人の行動が気になり、自分のルールに見合った行動をとっていない人がいると厳しく注意する。

2. 日常生活について

高等部3年生(インテーク当時18歳)であるため、卒業後の生活を視野に入れ、週に1回作業所へ通い、ヘルパーさんとの交流も図っている。

日常生活では、スーパーなどに売っているようなパンは好まず、パン屋の手作りパンを好む。お惣菜も美味しい高級店のものを口にしてしまうと今まで食べていたものを食べなくなってしまう。薬や病院、美容院が好きで、朝、体温計で体温を計ってしまうと病人になったと思込んでしまい、「学校を休む」と言う。美容院はきれいになるのが嬉しく、何時間でもおとなしく座ってられる。お風呂は20時半になると自分で風呂場へ行くが、前髪や目立つところしか洗わないので、母親と一緒に入り、洗っている。

卒業後は、作業所やデイサービス、ヘルパーさんとの交流をして過ごしている。

3. 学校での様子

学校では、先生がクラス全体に話をする際、Aは自分に向けられた話と思っていないので、教室移動の指

示などを先生から個別に指導してもらっている。しかし、「アイスあるよ」などの声には反応する。学級で、自分のルールに見合っていない子を注意に行く時があり、周りの生徒はAに近寄らないように指導されている。

4. 来所に至る経緯

動作法の一週間キャンプで筆者がAを担当したことから動作法の継続を希望され、筆者の勤務している蒲郡市民病院にて動作法面接を行うこととなった。

5. 面接構造

時間枠は60分程度であり、面接は母親から近況を窺い、その間Aには自由画を描いてもらう。描画の後、医療用ベットにて動作法を30分～40分程度行う。

6. 動作課題

動作課題は、肩押さえ、腕上げ、軀幹ひねり、前屈・背反らせ、膝立ち、片膝立ち、立位課題を行った。面接は、病院で行うことから慣れないベットの上となるので、キャンプでの課題をすぐに導入することは難しく、クライアントのペースに合わせて動作課題を導入した。毎回の面接における動作課題の手順はおおよそ上記の通りである。1セッションで各課題を1回以上は行うようにした。なお、動作課題は、どの課題においても自己認知や他者認知を促がす課題といえる。

肩押さえ課題は、仰臥位で対面しながら援助者が軽く肩を押さえ、圧をかけることで肩の緊張をほぐしていく課題であり、Aが一番リラックスする課題である。面接では、仰臥位で援助者と眼差しを交し合いながら、話をする時間となっており、Aとの関わりにおいて重要な課題といえる。

腕上げ課題は、仰臥位で対面しながら援助者とともに腕を動かす課題である。腕の動かし方については、幾つかのパターンがあり、援助者が腕を補助しながら行うものや援助者の手の平と手の平を合わせながら動かしていくもの、同様にして指先と指先をあわせて行うもの、指先と指先を合わせながら援助者が色々な方向へ指先を移動させていき、やりとりや視線の共有をねらいとするものなどがある。基本的には対面し、なるべく視線を合わせるようにする（共同注意）。指差しと一緒に腕を動かす際は、指先に注意を向けるように促し、3項での共同注意を育むねらいがある。自閉症の場合は、視線をしっかりと合わせたり、眼差しを交し合いながら情動の交流を図ることが特に必要といえる。Aは共同注意や交互凝視は可能ではあるが、視線の合い方はやや弱く、眼差しを交わしていくことを積み重ねていき、情動の深まりをねらいとする。

軀幹ひねり課題は、側臥位で体幹を大きくねじるよ

うにゆっくり動かしながら、上体全体を弛めていき、心身のリラクゼーション的な意味合いを持つ。自閉症の場合、援助者にゆったり身を任せ、リラックスするということが難しく、身体に力が入ってしまうため身体のを抜くことが課題となる。

前屈・背反らせ課題は、胡座（または楽座）になり、腕を前に伸ばしながら上体を腰から前方に倒すように前屈して股関節部を弛めた後、上体を後ろへ反らせながら援助者に身を任せ、上体の緊張を弛めていくものである。背反らせ課題は、援助者に身を任せられることが必要となる。

膝立ち課題は、膝立ちの姿勢を保持したり、援助者の指示に合わせて重心移動する中で姿勢のバランスを取れるよう援助していく課題である。

片膝立ち課題は、片方の膝を直角に近い状態で立て、立てた片方の足の踵を床にしっかりと着けながら前方へ重心移動させていくものであり、足の踏みしめやバランス取りがねらいとなる。

立位課題は、援助者の指示で重心移動を行い、バランスを取れるようになることや踏みしめに重点が置かれる。自閉症の場合、足の使い方に癖のあることが多く、足の裏が内反足や外反足、土踏まずのない偏平足なども多くみられる。Aは偏平足がみられ、興奮状態になると、つま先立ちになるため、しっかりと踏みしめを行う必要がある。

なお、膝立ち、片膝立ち、立位課題はいずれも、バランスを保つために自己身体への注意集中が特に必要な課題であり、微細な自己調整力を育む意味を持つものと考えられる。

Ⅲ. 経過と考察

面接はX年8月からX+1年9月までの計40回を4期に分けて記した。クライアントをA、筆者をThとし、クライアントの言葉を「J」、Thの言葉を< >で表記した。

第一期：動作課題での関係作り（#1～10）

動作法においては初回、初めての場所であることや慣れない病院のベットで行うことが影響したのか「イヤ」など大声を出すことが多かった。緊張が高く、落ち着かない様子であったので、Aの落ち着く課題である肩押さえを時間をかけて行い、落ち着いたところで腕上げを行った。腕上げでは、Thと手を合わせながら行え、指先移動では指の方に注意を向けることができた。初回以降も「イヤ」など大声を上げていたが、肩押さえ、腕上げ、軀幹ひねり、前屈・背反らせをゆっくりとしたペースで取り組めた。#6から膝立ちを行えるようになり、#9から片膝立ちが可能になった。

動作課題への導入では、#5に絵を描き終わると自ら立ち上がり、自分でドアを開けてベットへ行くようになり、#9では絵を描き終わると母親を突つき、「体操やる」と自ら言うようになった。

肩押さえでは、#10になると、Thの手を自ら取って自分の胸へ持っていき、ジーッと押さえていた。腕上げでは、始めのうちはAのペースにThが合わせているような状況であったが、#10ではAの腕が真上を過ぎたところで腕が曲がり力が入るので、「真っ直ぐ伸ばそうね」と教示すると少しずつ改善され、こちらの意図を汲んで動かすようになった。また、交互凝視が上手にできるので、それを褒めると動きが早くなった。軀幹ひねりでは、Thが意図する方向へ身体を持っていきこうとすると逆に力が入ってしまう状況が続いたが、力が入った状態で待っていると回を重ねるにつれ、力が抜けるようになり、#8では「気持ちいい?>と問いかけると「気持ちいい」と言うようになった。しかし、途中で動かなくなることが多かった。前屈・背反らせでは、Aの気が向いた時に急に身体が動き出すといった状況で身体がとても硬かったが、肩周りを弛めることができるようになった。膝立ちでは、まずはThが膝立ち姿勢をして模倣するところから練習し、次第に型が取れるようになり、#9から重心移動が可能となった。片膝立ちはThの膝立ち姿勢を模倣する練習をした。訓練状況では、#5に「イヤ」と声を上げた際、小さな声で言ってくれば良いことを伝え、次からは「イヤ」と小さい声で笑いながら言うことがあった。#7では嫌な様子になった折、肩弛めに戻し、気持ちの切り替えをしてから、次の動作課題に移ると取り組めた。#8以降、終了時には、お互いに「ありがとうございました」と言うようになった。

学校での様子について、去年までは体育大会の練習に参加できなかったが、今年は参加し、応援旗に言葉を書く際、「イヤ」と言いながらも「がんばります」と記載し、氏名も書いた。体育大会当日は、全ての競技に参加した。今までは嫌だと頑としてやらなかったが「イヤ」と言いながらやるようになり、やりながら時折泣くようになった。また、先生に自ら話し掛けるようになり、新しい靴を気づいてもらえなかった時には、「靴買った」と自ら先生に話し掛けた。しかし、テーブルマナーの練習では洋服を着るのを「イヤ」と拒み、一人だけ体操服で行った。学校は制服、家では私服と決めており、譲らず、靴下も学校と家とで履き替えている。

作業所での状況においては、#3ではマフィン作りをやりたくないような状況になると、「キャー」と声を上げていたが、#7になると「手がベタベタになる」と言葉で言うようになった。#9では、オウム返しを繰り返す同じ自閉症者に向かって「いつも同じことば

っかり、くどいんだよー」と言った。

この期においては、少しでも動作課題が行い易くなるようにAの気持ちにThが合わせるように進めていった。Aは肩押さえが好きであり、イライラした様子が強い時は肩押さえを多めにいき、また他の課題で上手くやれなくなった際にも肩押さえに戻してから、再度上手くやれなかった課題に挑戦し、できるだけAの気持ちが向くように工夫して行った。病院のベットで動作法を行っていくことにも次第に慣れていき、自らドアを開けてベットへ行くようになった。Aなりに訓練を楽しみにしているように思われたので、Thにとってもやりがいを感じられた。学校の様子については、少しずつ適応が良くなっていると報告を受けた。Aはこだわり行動以外は受身で行動することが多く、自分から他者へ働きかけていくことが面接をする以前はあまりみられなかったが、自ら働きかけていくことが少しずつできるようになり、集団行動が取れるようになってきた。このような日常生活場面におけるAの主体的に適応していく様子と動作法での関わりの中でAからThへの働きかけが少しずつ行われるようになった様子(例えば#10のThの手を自ら取って自分の胸へ持っていき、ジーッと押さえていた)などが時期的にもピタリと重なっているように感じられ、A自身から他者へ主体的に働きかける面が芽生えてきたように思われた。

描画では、#1にペンギンを描き、#2で小屋の中にいるネコ、以降は、(クリーニングのような)袋の中に入った服、電車、リボンがかけられた袋の中に入った服、自分、ウサギ、タヌキ、クマを描き、#10では描かなかった。小屋の中にいるネコ(#2)、袋の中に入った服(#3、#5)というように中に包まれているものを描かれたことが印象的であった。

第二期：身体の変化(#11~22)

動作課題での取り組みについて、肩押さえでは、#11で赤ちゃんを最近抱っこしたこと、#13では隣の家の犬の赤ちゃんを抱っこしたという話をし、赤ん坊の話の最中は目を丸くして笑った。また、#12に訓練が嫌になると「うーん」と言い、嫌ということを表現したが、続けるように促すと行えた。#14になると、今までは縛っている髪が乱れることを気にしていたが、髪を気にすることがなくなり、終了を催促することもなくなった。#16では好きなテレビ番組の話になると楽しそうに笑い、#17ではイライラした様子であったので、Thが顔を撫ぜると笑い出した。#18では肩を押さえると気持ち良さそうにし、Thを見てニコニコ笑った。その際、Thが自己紹介すると、少し経ってからThのことを初めて「三浦」と言った。#19ではAが自分の胸にThの手を持っていき、両手でThの手を包むようにして、Aの胸にしばらくじっ

と手を当てていた。#20では、待合室で待っている間、近くにいた赤ちゃんを見せてもらったということで、ニコニコ嬉しそうにしていた。

腕上げでは、回数を重ねていくうち、こちらの意図が伝わるようになり、Thの意図した方向へ動かせるようになった。指先移動では、動作課題に気の向いている時を見計いながら行くと、Thと視線を合わせ、しっかり追従して行えた。上手にできた時は握手した。軀幹ひねりでは、動かしてほしい方向へ反発することが少なくなり、#18では自ら自分の腕を起こし、主体的な取り組み姿勢へと変化がみられ、次第に何度でも長時間行うことが可能となり、途中で動かなくなることもなく、スムーズにゆったり行えるようになった。#22では、自分の身体を感じ取り取っているような様子で瞳を大きくし、笑っていた。膝立ちでは、重心移動の動きが活発となり、#18からは、重心移動の際にThと一緒に「右、左」と言いながら行えるようになった。その際、得意げな様子も見られた。片膝立ちでは片膝立ち姿勢の模倣練習から始まり、前方への重心移動が可能となり、#15では、自ら「ギュー」と言いながら行うようになった。

身体の状態においては、訓練中に#13~16の間、毎回おならが出た。#22では、訓練中に「トイレ」と言い、出掛けたが自分でちゃんと戻ってきて訓練を続けた。訓練以外では、#11で生理になった際、初めて自ら「お腹が痛い」と言った。#19には2、3日食欲が落ちている状況の中、お漏らしが二日続けてみられた。#20では、口にヘルペスができた。

家庭状況では、レンジの使い方を覚え、お腹が空くと自らレンジで温めて食べるようになったので体重が増加し始めた。#15では、好きなテレビ番組が早く始まらないという理由で大暴れし、家族の髪の毛を引っ張ったり、親戚がいるからテレビが始まらないと怒った。お漏らしをした時などは、自分で下着を変えることはできるが、処理はできない。着替えなどで恥ずかしいという感情は理解できていないように思われるが、最近、漫画を読みながら「恥ずかしいの？」と恥ずかしいという内容のことを聞いてくることはある。ただ、気持ちは分からない。両親との関わりにおいて、父親の質問には答えても母親の質問には応じないところがある。自分だけ残っているお菓子がある際には、父親に見せびらかしてから食べ、人にはあげない。

学校では、真っ直ぐ歩くようになり、今までは歩いている時に人がいてもお構いなく、ぶつかっていたが「どいてください」と言うようになった。マナー講座では、化粧をしてもらおうのを嫌がり、自分で化粧をし、アイシャドーまでやっていた。普段、朝の会までに着席していないと納得しないにも拘わらず、#13では、学校のバスが遅れてしまい1限が始まった後に到着してしまったことを理由に久しぶりに暴れた。#

18からは、他のお母さんたちと話をするようになった。学芸会では、自ら主役を立候補し、その役をやることになったが、このようなことは初めてだった。今までの学芸会ではお弁当を食べると「帰る」と言い出し、帰ることが習慣になっていることから、できるのか心配したが学芸会当日はちゃんとできた。歌も口を開けて歌っていた。しかし、写真撮りの2回目に「何でやるの。イヤ」と言い出した。卒業式では、しっかりやれていたが母親の顔を見ると「帰る」と言った。卒業式当日の朝は「今日で学校終わり」と言っていたが、その後、毎日「明日は学校？」と聞いてくる。

この期においては、訓練の取り組みにおいて少しずつThの意図を理解し、Thのペースにも合わせようとするようになった。それに伴い、この期で注目したいのは、Aの身体面での変化である。訓練中によくおならが出るようになったことは、身体がしっかり動かしているためと考えられる。また、トイレに行きたい時にはきちんとと言えるようになり、用を済ませると自ら訓練に戻り、しっかり訓練を続けることができた。日常面における生理の際にも自ら「お腹が痛い」と言うようになったが、病院に来られた主訴の一つが生理の際のイライラであった。そういった生理的な面が原因でかんしゃくを起こしていることも考えられ、その点で、自己身体について自ら言葉で他者に伝えられるようになったことは大変意味のあることと考えられた。また、これらは、自己身体への気づきの深まりを示すものとも考えられよう。

描画では、#11は疲れたという理由で絵を描かず、#12は自画像を描いた。以降、服、電車、太陽と月、服、服と靴、赤ちゃんと服、服、ゲーム、食卓と料理、広場のような渦巻きを描いた。#17では描画の後、赤ん坊のアイテムを手に取り、Thに「ほしい」と言った。

#12で「自分」と言い、自画像を描いたが第一期の#6でも「自分」と言い、人物画を描いている。この2つの絵を比べると明らかに#12のものはAによく似た自画像となっている。これは学校のマナー講座で自分で化粧をした体験があったため、こういったものが描けたとも言えるが、自己を認知する力が深まってきたのではないかと考えられた。というのもAの描画を描く様子は、画用紙を出されるとスラスラと描くので、自己イメージをしっかり保持できていないと、こういった描き方はできないのではないかと考えられるからである。また、この期においても服を4回描いているが、第一期とは違い、いずれも袋には入っていない服であった。Thは、今までは外の世界から隔たるように中で大切に包まれていたものが、袋が取れ、外へ出たという印象を受けた。

第三期：環境の変化と不安定さ（#23~29）

第三期においては、動作法のキャンプに参加した後、キャンプでのやり方とセッションでの違いがあったためか、興奮する場面が多かった印象である。#23では、非常に小さな傷を理由に腕に傷があるからと訓練を嫌がったので、バンドエイドを貼ってあげると仕方がないといった様子で課題に向かった。腕上げの際、やりたくない様子であるにも拘らず促していったので、「何で分かってくれないんだよ～」とThの白衣を引っ張ったが、前屈・背反らせになると落ちて着いた。#24では動作法の一週間キャンプに参加し、<キャンプはどうでしたか?>と質問すると、「楽しかったです」と答えた。母親とThが話をしていると母親に向かって「もー」と怒った。訓練では一週間キャンプのやり方に慣れてしまい、適応しにくく、「面白くないんだよ」、「胡坐いや」と座り込む場面もみられた。Aの動きや波長に合わせる事が難しかった。#25では、イライラした様子であったが、肩押さえをじっくり行っていくとリラックスした様子で深呼吸し、笑顔がみられた。軀幹ひねりではしっかり動かすことができ、前屈・背反らせでは肩や胸を充分開けた。#26では、膝立ちで前後の動きを伝えていくとスムーズに取り入れることができた。この回から立位を導入し、立位の重心移動をThが型を示し、模倣する形で練習してみると、「分からない、分からない」と声を上げた。不安な状況を和らげるため、<大丈夫>と伝え、褒めながら促して行くと、本人なりに努力していた。#27では、来院時に機嫌が悪く、Thが画用紙を差し出すと破って丸めたので、丸まった画用紙を広げ、破れた紙で使える部分をハサミで切り取り、もう一度Aに差し出すと、その小さな画用紙に絵を描いた。軀幹ひねりで身体が弛むと笑っていた。#28では、絵を描くのを嫌がり、すぐにベットへ向かい、靴を脱いでベットに仰臥位になり、Thが来るのを待っていた。#29では、軀幹ひねりの時間が長くなるにつれ大声を出して怒った。ギッタンパッコンに誘ってみたが嫌がり、行えなかった。訓練状況において、Thの指示を理解してはいるが自分のペースが中心であり、Thのペースに合わせてようと努力する姿勢があまり見られなかった。集中することが難しく、臍や鼻を触ったり、遠くをみているような視線になることが多く見られた。

作業所においては、今までのように集中して作業することができなくなり、#26では、大声を出していた。デイサービスでは、#27から今まで昼食を皆と一緒に摂ることが出来なかったが摂れるようになった。

家では、野菜の皮むきなどの手伝いをするようになり、買い物も母親と一緒に来て来るようになった。#28では、イライラしており、家族や犬に当たっていた。#29から「今日は、学校へ行くの?」と母親に毎日聞くことはなくなった。

この期においては、大声を出すことが多かったが、高等部を卒業し新しい環境に適応しなくてはいけない時期でもあるので、新たなステップを踏み出したことによる模索状況と考えられる。全体を通してAのペースが中心であり、訓練が充分行えないことが多かった。Aは思うように行かない時、指導的立場の人に向かって暴言を吐くことが多いがThに対してはそのようなことはなく、「何で分かってくれないんだよ～」と自分の気持ちを吐露することがみられた。病院では静かにすること、大声は出してはいけないこと、やっていいこと、いけないことを何度も繰り返し伝えていった。#27では、来院時に機嫌が悪く、Thが画用紙を差し出すと破って丸めたので、丸まった画用紙を広げ、破れた紙で使える部分をハサミで切り取り、もう一度Aに差し出した。機嫌が悪くても画用紙を破ってはいけないこと、たかが画用紙であっても大切に扱わないといけないこと、破ってしまえばお終いということではないという気持ちで望んだ。その辺りの気持ちの交流はAと暗黙にできてきているように感じられた。

全体としてこの時期は、状態が不安定でイライラする様子が多くみられた。高等部を卒業し、作業所等での新たな生活が始まった時であり、今までの生活パターンから新たな生活様式を身につけていかななくてはならなくなった適応の課題が背景にあるものと考えられる。一方で、デイサービスで皆と一緒に食事できるようになったことや、家庭でも母親の手伝いをするようになるなど、集団への適応や対人的な関係性の深まりを窺わせる面も見受けられた。

なお、描画では、#23に風車を描き、以降、車と風景、箱に入った3台の車、家、糸糸を描いた。#28は描かず、#29ではタヌキを描いた。第一期などには、ぬいぐるみのような動物が多かったが、第三期に入り、風景など外の世界を感じさせるものがみられるようになった。しかし、この時期の不安定さを示すように、画用紙を破ったり、第二期でみられなくなっていた、袋など何かに包まれた物（#25箱に入った3台の車）も再びみられたのが印象的である。

第四期：社会的行動様式の変化（#30～40）

動作課題での取り組みについては、三期においてA自身のペースが中心となっていた。それを打開しようと、Aが一つの課題を終わりたい様子にみえてももう少し行ってから次の課題に移るように意識し、嫌がってもすぐにそれを受け入れるのではなく、少しずつThのペースにも合わせてもらうようにした。

動作課題の導入では、#30で絵を描き終わるとThの腕を持って動作に誘ってくれ、#31においてもAの方から「やろう」と誘ってくれた。#32では、母親がThと話していると、「もう止めて」と母親を怒

った。その日の来院前にヘルパーさんと出掛け、ヘルパーさんがその際の状況について母親に話すと、「もう帰って」とヘルパーさんを怒っていたことから、自分のことを話題にされているのが分かり、それが嫌な様子であった。描画を終えると自ら「訓練やる」と言った。#36には、<動作に行きましょう>とAを誘うと「うん」と言ってThの両手を持った。#40では、母親の話が長くなると「まだ?」と聞いて来るので、少し待っていて欲しい旨を伝えるとベットで横になり、待っていた。

肩押さえでは、#30において<最近赤ちゃん抱っこした?>とThが質問すると「犬の赤ちゃんを抱っこした」、「フサフサだった」、「アーンって言った」と犬がアクビする様子を表情で真似て表現した。また、#32においても犬の話題になると、犬を抱っこしたことを思い出した様子で、「アーン」とアクビして犬の真似をし、「シッポがフリフリして可愛かった」と言った。#33では、Thの手を持ち、自分の頬にThの手の平を当て、嬉しそうに微笑んでいた。#35では大きく瞳を開き、Thを見つめ、Thの手を触った。#37には、両脛を指先で思い切り大きく開き、目がいっぱいになるような状態でThと視線を合わせるの、Thも同じように自分の脛を指先で思い切り開き、目を大きくして互いに眼差しを交わし、一緒に笑った。#38においても同様にするので、またThもAを真似し、眼差しを交し合った。その際、Thの顔のホクロが気になったのか、Thの顔のホクロを取ろうと躍起になるので、<止めて>と言うが止めてくれず、Thの鼻をつまんだり動かしていた。#40でも同様に脛を広げ、眼差しを交し合った。

腕上げでは、#31に「元気が出ないのでやりたくありません」と言うので、<どうしたら元気になるのかな?>とAの顔を撫ぜると行えた。こういった自分の気持ちを表現することは今までにないことであった。#39では、様々なバリエーションで行え、しっかりと視線を合わせ集中していたので、そのことを褒めると「ヤッター」と言って笑った。交互凝視しながら、Thが指先をクルクル回しても追従できた。

軀幹ひねりでは、A自身よく努力しながら身体を動かした。身体が充分弛むようになり、かなり柔らかくなった。力が抜けた時、<今、抜けたね>と伝えると「うん」と言い、Aも身体力が抜けた感じを体感している様子であった。前屈・背反らせでは、かなり柔らかくなったので胡坐姿勢で両足裏をつけて行う、難易度の高い楽座姿勢に切り替えたが、それでも楽々とやれた。お互いのペースが合っていると感じられ、Aの前屈姿勢での身体の曲線がきれいなので、<きれいにできますね>と伝えると何度も得意げな様子で行った。次第に背反らせの動きが柔軟になり、背反らせをしながらThと視線を合わせ、背中上部まで曲げ

ることができるようになった。

膝立ちでは、重心移動が左右前後もできるようになり、右や左を教えながら行うと自分で何度も「前、後ろ、右、左」と動かす方向へ声を出しながら練習した。右手や左手なども教えていき、質問をすると得意そうに答え、褒めると誇らしげな様子で嬉しそうな表情をした。片膝立ちでは、前後の重心移動ができるようになったので、ハイタッチした。前方へ行き過ぎて倒れそうになる時は、進み過ぎないように<ストップ>と声を掛けると「ストップ」とThの言葉を繰り返した。<止まるって意味よ>と伝えると、「うん」と内容を理解した様子で頷いた。前へ重心を移動していく際には、自ら「キュー」と言い、踵を地にしっかり着けるよう指示すると踵に力を入れ、踏みしめができた。#37では、ThがAの足を補助し、踏みしめを強化しようとする、自ら「できないよ」と言うので、補助なしに戻し、できたことを褒めた。

立位ではThが<右やって>と言うと、自分で右方向へ重心移動した。#38では、左右を自ら言いながら重心移動し、何度も上手に行うので、褒めてから終了を伝えると自ら手を出して握手した。#40では、身体の動きが正確になるよう補助をしながら行った。訓練状況では、肩押さえや腕上げ課題などで眼差しを交し合う際に、目の表情がいろいろに変化するようになって来た。目にもいろいろな表情がついて、その時々で視線の持って行き方や瞳の様子が変化してきた。

動作課題の面では、#38では前屈・背反らせの前に自ら「膝立ち」と言ったが、前屈・背反らせをまだやっていたので、その旨を伝え、前屈・背反らせを先に行ったが動作課題を意識できている様子がみられた。#40には、前屈・背反らせの前に自ら前屈姿勢になって準備しており、取り組む姿勢が変わってきた印象。

デイサービスでは、お茶などに誘われた際、「これを読んだら行きます」と返事したり、帰りたいた時には「もう帰ります」と自分の気持ちを表現するようになり、家以外のところではおとなしく、人の言うことを聞けるようになった。しかし、言われたことを出来ない子に対してはまだ注意してしまう面がみられる。

家庭状況では、家族とよく話をするようになったが、本を読んでいる時は話し掛けても応じようとしないうちがまだみられる。一人で自室にすることが少なくなり、居間で皆と一緒にいるようになったが、大きな声でブツブツ言いながら歩き回るため、テレビの前に来ると邪魔なので家族に注意される。#40になると、毎日、新聞でテレビ欄をチェックし、テレビを見るようになり、自分でチャンネルを変えることを覚え、好きな時にチャンネルを変えるようになった。家族でテレビを見ていると良い場面でサッと変えられてしまったり、気づかぬうちにAの好きなテレビ番組に変わ

っていたりする。悲しい場面を見ると笑っており、人と笑うところが違っている。新たに、お笑い番組を見るようになり、人の失敗を見て笑っている。食事では、食事の途中でスーッと出て行き、また戻ってくるようになり、集中して食べることができなくなっているが、食事中、人に注意することはなくなった。今まではAがゴミやコップなどを持って「ん？」と聞いてきた時、母親が「ここに捨ててもいいよ、洗っていいよ」とAの気持ちを汲んで答えていたが、自分でゴミを捨てたり、コップを洗って置くようになった。お風呂では、母親と一緒に入りながら「右手を挙げて、左手を挙げて」と言うようになってくれたようになった。外出では、以前は事前に知らせないと外出できなかったが、突然でも行けるようになり、土日の外出もしなかったが、土日でも買い物などについて来るようになった。#39では、新しいヘルパーさんとも問題なくやれた。名前を呼ぶと振り向くようになり、月に二回来たり不安定であった生理が月一回の周期に安定し、パニックで暴れることが少なくなった。

描画では、#30にカブトムシを描き、以降、テントウムシ、ヘルパーさんの人物画、ウサギとThの人物画、花、#35は「描きたくない」と描かず、#36から自動車、家の犬、空、車、木を描いた。#31に描画を行う際、Thと視線が合うとニコニコ笑い、照れた様子で少し顔が赤らんだ。テントウムシの絵を描いたので、<テントウムシとカエルどっちが好き？>と聞くと「テントウムシ」と答え、カエルはピョンピョンするのが気持ち悪いといった様子で身振りや表情でカエルの気持ち悪さを表現した。#33では、ウサギを描き、Thが<私を描いてください>とお願いするとウサギの隣にThの似顔絵をThの方を見ることなくスラスラ描いた。#35は、Aの誕生日であったので、その旨を伝え<おめでとう>と言うが理解する様子もみられなかった。絵は「描きたくない」と描かず、本を読むのに夢中であった。#38には、スラスラと描き、Thと視線を合わせ「空」と言った。

この期においては、表情の表出がみられたことが重要な点であると考えている。#31においてThと視線が合うとニコニコ笑い、照れた様子で少し顔を赤らめた。照れた様子で少し顔を赤らめた表情というのは、一般的な自閉症者の無表情で強張った表情からは、かけ離れたものに思われた。また、テントウムシの絵を描いた際に<テントウムシとカエルどっちが好き？>と聞くと、「テントウムシ」と答え、二者選択ができていた。こういった質問に答えることは今までなかったと思われる。その時、カエルはピョンピョンしているのが気持ち悪いといった様子で身振りや表情でカエルの気持ち悪さを表現し、その表現がよく伝わってきた。また、犬を抱っこしたことを思い出し、「アーン」とアクビして犬の真似をした。このような

表現ができるようになった背景には、やはりA自身の体験がまずあって、その体験を通して記憶やイメージとして保持され、その記憶やイメージが想起された時、想起された記憶やイメージを表現しているものと推測される。

また、描画において、ヘルパーさんの人物画（#32）やThの人物画（#33）など、人物画が自画像以外のものに広がりを見せてきたように思われた。しかも、ヘルパーさんやThの人物画はどちらも明らかにそれぞれの人物の特徴をよく描き分けていた。Aが描いたヘルパーさんの絵を母親が見てもすぐに分かるものであったし、Thの絵もやはりThらしいものを描いていた。紙を差し出されるとすぐにスラスラと描き、よく似ていることから、認知した他者像を記憶として保持し、保持したイメージを表現していることが推察される。第一期における#6で人物画を描き、「自分」と言ったが、これはあまりAには似ておらず、ただ人物を描いているという状態であり、まだその時期は自己認知が弱く、自己像と他者像ともやや曖昧な状態であったといえるのではなかろうか。#37で家の犬を描いたが、これについても家の犬によく似ているということであり、他者や事物もよく把握しているといえる。

自閉症者であっても援助者の意図に対する理解を通して援助者のペースにも合わせられるようになり、また、何より対面し触れ合いながらしっかりと眼差しを交し合う体験の積み重ねを通し、結果として対人的な理解が深められたとも考えられる。描画からは、自己の認識や他者の認識、また事物を認知する力が深まっているように推察された。

IV. 総合考察

Aとの面接経過を四期に分けてみてきた。第一期では、ThがAのペースに合わせながら動作課題に取り組み、第二期になると、AがThの働きかけを理解し、その意図に合わせるように身体を動かす様子が少しずつみられるようになった。第三期は、新しい生活がスタートした時期であり、なかなか思うように動作課題に乗ることができなかったが、第四期になると第三期の状況を見事に乗り越え、Thの働きかけや意図に合わせて、自身もよく努力しながら身体を動かせるようになった。他者のペースに合わせることができず自分のペースを守って生活している自閉症者にとって、動作法での援助者の意図を把握し、援助者とともに一つの動作課題に向かって身体を動かしていくという共同作業によって援助者との二者関係が築かれ、対人理解を深めることができたものと考えられる。

動作課題を遂行していくことは、援助者とともにA自身も身体に注意を向けながら援助者の意図する

方へ動かせるように努力していくことであり、共同注意をともに行いながら互いのペースに合わせていくことともいえる。視線のやりとりも含めた援助者との身体的相互交渉から、援助者という他者の存在との繋がりを身体で実感し、他者を認識する力が育まれていったものと考えられる。森崎(2002, 2004)は動作法の実践を通し、これまで対人認知の形成において眼差しを交わすことの重要性を論じている。本事例においては、セッション開始時の導入や落ち着きのない時など、Aが仰臥位になりThと対面した状態で、ゆったりした状況の中での肩押さえ課題を多く行っており、その際に対面したまま眼差しを交わし言葉も多く交わしているのが関わり大きな特徴といえる。第四期で対人認知における深まりをみせたAが自ら両脇を指先で思い切り大きく開き、目がいっぱいになるような状態でThに眼差しを投げ掛けてきたことは、人に対する関心と対人認知の深まりを示唆するものと考えられる。自閉症者は対人的な関心が希薄で、表情認知や視線の理解などにも遅れを示すことが一般にもよく知られているが、このように、自ら脇を開き、Thと対面してじっくりと向き合おうとする行動は、その内面的変容を特徴的に表すものといえよう。そのような意味においても、セラピーにおいて、身体を介し濃密に関わりながら、対面し、言葉と眼差しをしっかりと交わしていくような関わりが如何に対人的な認識、対人的な関係性の深化に重要な意味を持つかを物語っているように思われる。

日常生活場面における社会的行動様式では、第一期において自分から他者へ働きかけることがみられ始め、第二期になると自分の身体に関することを自ら他者に伝えるようになった。また、レンジの使い方を覚え自分で食べるようになるなど日常的な行動の幅も広がりを見せた。第三期では、高等部卒業に伴う新たな生活環境がスタートし、適応の難しい状況がみられた。第四期になると、新しい生活にも慣れ全体に状態が落ち着きを取り戻してきた。また、新聞を見てテレビチャンネルを変え番組を楽しむ、食器などを自ら洗うようになる、家族と一緒に過ごすことが増え家族とよく話しをするようになるなど、Aの日常的な行動の幅もさらに広がりを見せ、生き活きと生活を楽しんでいる様子が窺われた。これらについても、やはりその基盤に対人的な関係性の深まりが窺われる。動作法を通じた関わりにより、日常においても周囲の人に注意がよく向けられるようになり、指示理解も高まったものと考えられる。また、腕上げなどコントロール課題を通し、行動の自己調整力にも高まりが見られ、それらが相俟って日常的な行動の広がりにも繋がったものといえよう。

描画においては、第一期では、何かに包まれた物が多くみられたが、第二期では袋状のものがみられなく

なり、第三期で不安定になった時期にまた一時的にみられた。袋状の表現が外界との関係性を表すもののように感じられた。また、第一期で描かれた自画像は自己像が曖昧な印象であり、自己と他者も充分分化されたものとはいえない状態とも考えられたが、第二期では自画像がAとよく似たものへと変化し、第四期になるとヘルパーさんやThを描き、他者についてもよくその特徴を捉えた絵を描いた。このような点からも、自己像の深まり、他者像の深まりと自己-他者の分化が示唆される。また、第一期、第二期では自画像だけでなく、服など自分が身につけるものを描くことがあり、自己に対する視点が中心であるように思われたが、第三期、第四期になるとそういった自己に対する視点があまりみられなくなり、他者や外界の風景など、より対外的な事物に視点が移ってきているように感じられた。自己に対する視点から他者や外界へと視点が移行しているように見受けられた。

動作法面接における関わりから青年期の自閉症者のことについて考えていく。第三期でAがThに向かって「何で分かってくれないんだよ〜」と言っている。自閉症者が興奮したり、パニックやかんしゃく、こだわり行動の強化などがみられた場合、適応に対する対応について考えがちであるが、私たち援助者にとって大切なことは、そういった興奮、パニック、かんしゃくなどを生じざるを得ないくらい生き難い状態であることを想像してみるのではないかとと思われる。興奮やパニックを起こす背景にどのような要因があるのか、例えば、コミュニケーションのとり辛さ、コミュニケーションが上手く取れないことから自分の要求を誰にも理解してもらえない辛さなど自閉症者の気持ちに立ってみることが必要だと考えられる。そういった自閉症者の気持ちに立ってみると、十分な理解とまではいかなくとも、こういう感じなのかという感覚は少しイメージできるのではないかと考えられ、そういった援助者の姿勢によって自閉症者は気持ちの納まりがついてくるのではないかとと思われる。さらに、そのようなところの交流により、援助者から思いやってもらう体験を通し、思いやりのところが育まれていくのではないだろうか。

動作法と描画という一見全く性質の異なるものに思われるかもしれないが、Aとの動作法面接の中で身体とところの変化を感じながら、同時に描画での表現を受け取りつつ、進めてきた。身体を通じた関わりから対人理解が深まり、それはA自身が生活を楽しむことに繋がっていったということもできる。今回は、青年期にある自閉症者を対象とし、動作法を通じた関わりを行ってきた。一般的な成長がほぼ落ち着いた段階からの取り組みであり、他には特にはセラピー等を行っていないことから、今回の取り組みの効果について純粋に捉え易いように思われる。まず、一つ

には、発達過程にある自閉症児に限らず、青年期以降の自閉症者を対象とした場合でもこのように明らかな変化を遂げるといふ点であり、その意味で動作法の可能性がさらに広がったように思われる。また、その内容を振り返ると、特に他者へ認識がより明確になり、それを通して指示理解や、対人的な疎通性が発達し、対人的な関わりが広がりも見られた。まさにこれらは、幼児を対象とした場合でも共通するものであり、対人的な領域に関しては年齢の程度とは関係なく効果が見られるものであると考えられる。特に我々の取り組みは、受容的な雰囲気の中で、対面し眼差しを交わし、3項的な共同注意をも意識しながら、身体を介したつぷりと触れ合う点が従来の動作法での取り組みと異なる点である。今回の事例においては、そのような関わりの特徴がより明確に表れたものと考えている。

文献

森崎博志 2002 自閉症児におけるコミュニケーション行動の発達的变化と動作法 リハビリテーション心理学研究, 30, 65-74.

森崎博志 2004 自閉的な子どもへの身体を介した関わり意義 -発達の視点からの理論的考察- リハビリテーション心理学研究, 32, 2, 49-61.